

圖の如く枝の實を栽れば、根に又を生じて鬚多し、牛房など又多きは枝の實なり、藥品にても獨活くわつ、活白芷くわつひやくし等、根に又多きは下品なり、實をとり時心得あるべし、
〔源氏物語四十九〕木がらしのたへがたきまで吹とせしたるに、残る木すゑもなくちりまきたるもみちをふみ分けるあとも見えぬをみわたして、とみにもえいで給はずいと氣色ある深山木に、やどりたるつたの色ぞまだのこりたる、こだになどすこしひきとらせ給て、宮へとをぼしくてもたせ給、

やどり木と思ひいでずばこのもとの旅ねもいかにさびしからまし、とひとりごち給をき、てあまざみ、

あれはつるくち木のもとをやどりぎと思ひをきけるほどのかなしさ、あくまでふるめきたれど、ゆへなくはあらぬをぞ、いさゝかのなぐさめにはをぼされける、

〔河海抄十〕木八 木八 木八 つたのたぐひ也

〔愛媛面影四伊豫郡〕扶桑木。

本郡村離山より堀出す、一種の埋木なり、俗相傳上古扶桑と云大樹有けるを、その根年久しく土中に在て朽残りたるなりと、仍て扶桑木と名く、鏤て印鈕に造るべく、刻みて印籠の帶付と爲べし、木質堅緻色深黒にして光澤あり、最愛玩すべし、

〔扶桑樹傳并序〕伊豫國沙門明月述

景行天皇西征熊襲未幾事畢、以其便道巡幸伊豫國、駐蹕熱田津行宮、蓋爲溫泉也、此時始見僵樹、異而問之、遂得其實也、又後六百三十餘年、舍人親王略載諸日本紀、然當時原文既殘缺、無所取正、則纔存其可讀者、而質諸來世、故今折衷古書所稱、及我鄉散史舊聞、補綴而述扶桑樹傳、維時安永九年歲次庚子九月上絃也、其傳曰、維大日本國、人皇立制、第十二主纏向日代宮、馭宇天皇登極、十八年戊子